

## 常識、哲学、科学

田邊 元

### 一

我々の常識が哲学に要求し期待する所は、単に日常生活に処して誤らざる正常健全の良識たるに止まらず（これは常識そのものの自ら標榜する所に外ならない）、更に平常的なる常識の規準が其効力を失い価値の判断が方向を喪失する如き非常特別の危機に際しても、価値の顛倒から新しき価値を創造し、相対的なる規準の喪失に於て絶対的なる規準を獲得せしむる如き叡知たることにある。斯くして常識の混乱に陥る多岐矛盾の間にあつてその立つ所を奪われず、常識の蹉躓する逆運に会してなお安んずる所を失わざる所謂安心立命を与えることが、哲学の当然なる任務とせられるのである。常識が其能力の制限を自覚し、自己以上のものとして哲学の権能を承認するものもこれが為に外ならない。加之更に一步を進めて考えると、常識が平常何等疑う餘地なき当然の事柄として承認する所も、それ等の間に矛盾の存するに由り疑念を挟まれ、進んで其根拠に反省の向けらるるに及んでは、容易にそれに対する根拠たるものを捉うる能わず、或は一応根拠と認めらるるものも、なお進んで其根拠の根拠を問ひ、理由の理由を求むる要求に会しては、直ちに動揺すること免れず、凡てが相対化せられて何等絶対的に確固たるものが発見せられないようになる。是に由つて、常

識の限界が常識に対して暴露せられるのは必ずしも非常特別の場合に限らない。既に常識が自己自身の内に矛盾を発見すればそれは動揺を感ずるのであり、進んで其認むる所に理由を求め根拠を発見せんと欲するに及んでは、それは到底越えることの出来ない限界に撞着し、行詰まりに陥ることを免れないのである。哲学は常識の斯かる限界を越え、行詰まりを打開するものとして、常識自らに由り要求せられる。其故此見地から、哲学は常識の自己否定が産出するものであると云つても差支ない訳である。

此様に考えると哲学は、常識の相対的立場がその相対性の故に矛盾に陥り混乱を惹起し、其極自己を否定するに由つて、之を救う絶対的なる叡知として要求せられるものといわれる。哲学の発生には、常識の承認し信頼する所が凡て動揺震撼せられ、何等の抛る所なきに至る大疑の逢着せられることが必要である。その大疑の極まる所一切を否定するものは即ち一切を肯定するもの、凡てを殺すものは即ち凡てを生かすものなる転換の行わるるに由り、哲学の絶対的なる立場が生まれるのである。単に常識の延長としては哲学は発生しない。必ず常識の一たび行詰まり否定せられることが哲学の発生に対する機縁となる。哲学が常識から尊敬せられると同時に危険視せられ、哲学者が常人から狂人扱いを受ける所以である。ヘーゲルの語を借りて、哲学の世界を此意味に於て「顛倒せられた世界」と呼ぶことも出来るであらう。併しながら哲学の絶対的立場が常識の相対的立場に対立し、後者を否定して唯自己のみを肯定するものとして後者の外に立つならば、それは却て相対に対する絶対として自ら相対となり、而も自己の肯定は他の否定に於て成立する為に、却て否定すべき他を自己の外に豫想するに由つて、実は他なくして自己が有ること能わざる相対者たることを実証する。単に直接に他を否定するものは決して絶対たる能わず、自ら相対に止まるのである。所謂断常の二見として排せらるる二元相対に陥ることが斯かる抽象的絶対観の運命に外ならない。之を免れるには、却

て他を否定することに於て他を肯定するものが自己であり、斯か様に他を肯定する自己の否定以外に自己の肯定無きことを覚るにある。即ち有と無とが互に互を媒介し、肯定と否定とが転換せられ、自と他とが回互せられることを必要とするのである。斯かくして相対が相対を否定する相対の自己否定が積極的に肯定として絶対であり、相対にして、相対に止まり相対に執とわるる所無き、絶対的転換媒介の運動が所謂いわゆる即静として相対即絶対たるのである。此外に別に絶対なるものの存在することはない。其故それゆ常識の相対を殺すものは常識の外にある哲学の絶対観ではない。実は相対を殺すものも相対なのであり、寧むろ相対なるが故に、一は他を豫想しながら却かえて他を排除しようとする矛盾に陥るのである。この相対の矛盾に由る自己否定が却かえて絶対否定の肯定として積極性に転換せられる所に絶対は現前する、というべきである。今まで自己の外に起つた相対に由る否定が、今や自己自身の活動に転ぜられ、否定即肯定の絶対無としての自己が現われるのである。

此この様に常識そのものに存する矛盾、それに由る自己否定が、却かえて絶対否定として即肯定となる転換媒介の運動のみ哲学の絶対的立場に外ならないとするならば、哲学は決して単に常識を殺すものでなく同時に之を活かすものでなければならぬ。哲学は常識を殺すことに於てそれを活かし、常識は哲学に於て死すると共に生きるのである。一たび顛倒せられた世界は新たな風光を帯びて再び原の形態を現わす。所謂いわゆる、到得帰来無別事〔到り得て歸り来たれば別事無し〕、廬山烟雨湘江潮〔廬山は烟雨、湘江は潮〕である。平常心是れ道という如く、危機に処して誤らざるものは平常の心であり、非常も非常にあらず却かえて平常に過ぎざるに至つて、平常心は平常にして平常にあらず平常以上のものとなる。所謂いわゆる十二時を使い得る者にとつては日々是れ好日、何れの時か可ならざるあらん、である。常識が哲学に期待する所は斯かかる境地に外ならない。それが之を忌揮しつとも畏敬する所以ゆである。常識は自己の内に存する矛盾に動揺せしめられ、自己の力で越えることの出来

ない限界を自覚するが故に、危険視しながら哲学に頼ろうとする。哲学が世俗から白眼を以て視られながらなお一種の尊敬を受ける理由である。斯様な関係に於て観られた哲学は従つて、常識と同じく全く実践的な知恵でなければならぬ。常識も識と呼ばれるからには知識に属するものに相違無いが、しかし科学の如く何等かの意味に於て当面の実用から離れて知識の為に知識を求め、という意味を全然含まざる、直接に生活の実際と合一せる知識であることを特色とする。それは日常の行動実践を指導して誤る所無き、實際的判断の能力として、徹頭徹尾實際的でなければならぬのである。苟も實際から遊離した知識は常識とはいわれない。ところで哲学も常識からその転換媒介として要求せられる限りに於ては、常識と同じく實際的なことを必然とする。如何なる人生の転変に処しても誤らず、常識が昏迷に陥る如き危機難局に臨んでも、なお道無きに道を見る底の能力ある知恵にして、始めて哲学であるといわれる。哲学も飽くまで實際を離れず、人生の實踐から生れた知恵であると同時に、實踐を導く知恵でなければならぬ。實踐に役立たぬ知識は哲学とはいわれない。是れ哲学が博識と區別せられる所以である。禪が見性悟道を第一義とし、教相家の学識を生死の出離に係わりなきものと看做した態度は、常識が哲学に期待する所と相通するものがある。ソクラテスが哲学者の儀表と仰がれるのも此見地からして当然と解せられるであらう。何等特別の学識無きも人生の實際から常識以上の深き知恵を汲取り、波瀾多き閱歴の間に、運命の転変に左右せられざる信念を獲得した人を、哲学を有する人と称する如きは此意味に於てである。我々は常識の哲学に対して要求する此實際性を決して観過することを許されない。哲学者が単に学識ある者の謂でなく、必ず人生の實際に処して道を誤らざる実践的達識者たることを要するとせられるのは、常識との関係から見て当然の事であらなければならぬ。

常識と哲学との関係が一応右の如くに考えられるとすれば、哲学は一見単に常識の深められた延長であるかの如くに見えるけれども、斯く観ることそれ自身が常識の立場に外ならないともいわれるのであって、哲学は常識の単なる延長ではなく、常識の否定即肯定的なる転換が始めて哲学を成立せしめるものなることが、哲学の自覚に属するのである。全然哲学を含まず常識のみに終始する立場からは、両者の関係を具体的に理解することは出来ぬ。絶対否定の転換に由つて両者が媒介せられるという如き理解は、既にそれ自身が哲学の立場に於てのみ可能なのである。深められた延長は実は単なる延長でなく転換飛躍なのである。常識に比して深いとは、一たび常識が顛倒せられることを意味するのでなければならぬ。併しながら斯様に常識を顛倒する立場も、否、常識自らが自己を否定し顛倒することによって現前する立場も、再び常識がそれに於て活かされる点から観れば、常識の延長として見られる理由を有することもまた無視出来ない。所謂無事はれ貴人などといわれる如く、哲学の絶対的立場も何等常識の日常的立場と対立する所なく、廓然無聖之を莊嚴すべき神聖にして神秘なるものを全然脱却せることが、真に絶対的なるものの証徴といふべきである。最大の神秘は所謂神秘の無いことではなければならぬ。常識が行詰まりながら通徹すること、換言すれば非常が非常にして而も平常に外ならざることが、最大の不可思議である。不思議は所謂非合理にあるのでなく非合理即合理なる絶対合理性にある。更にいえば、平常が平常にして而も実は平常にあらざるに至つて、神秘は極まるといわねばならぬ。矛盾が矛盾にして矛盾でない、否定が否定にして同時に肯定である、という程大なる不思議があるであろうか。而も外から見れば斯かる通徹せる立場も、未だ行詰まらない常識の立場と

異なる所は無いのである。否、常識と称せらるるものも、真にそれが日常に処して誤る所が無く、何等か變通の自由を有するならば、既にそれだけ轉換の妙機を含むのである。如何に平常的な生活といえども、全然同一の経験を繰返すものではない。不斷に変化し毎瞬に新なるものを含むが故に、生活なのである。其故それゆえ単に平常に処して誤らざる常識といえども、実は何等かの工夫を経て變通の妙を獲得して居るのでなければならぬ。常識も無意識に小規模に於て轉換の機を含む限り常識として役立つのである。ただ哲学に於ける如く其轉換が意識的意図的でなく、直接にして反省を含まないだけである。全く轉換を缺くものは常識として實際に通達することも出来ない。此様このように考えると、常識と哲学とは一方から見れば曩さきに述べた如く否定的に對立し其間が断絶せられるのであるけれども、他方から見れば相聯関し相合一するといわれなければならぬ。哲学が常識の延長として認められるのは啻ただに常識の浅見にのみ歸せられるべきものではなく、哲学自身も自らを常識と合一するものと見ることが出来るのでなければ、却かえて哲学として未熟なることを免れないのである。

果して然しからば、初に常識と哲学とを區別し對立せしめたことは、今全く無意味に歸するではないか、という疑問が起ることを免れまい。併しかし必ずしもそうではないのである。成程常識と哲学とが合一するとすれば、両者は全く區別が無いようにも思われるであろう。併しかし合一するとは區別せられるものが合一することではなければならぬ。全然同一にして唯一なるものは合一しようは無い。常識と哲学とは區別せられ相對立するが故にこそ却かえて合一することが出来るのであつて、両者が全然同一ならば合一すべき謂われは無いのである、ただ既に常識の内にも哲学があり、哲学の内にも常識があるから、両者は概念上區別せられるに拘かわらず、事実上全く分離することは出来ない。これが前に述べた相對即絶対の構造に外ならぬ。即とは相對立するものの

合一する関係である。唯一同一なるものは即という関係を含むことは出来ない。相對即絶對とは兩者に區別が無いという意味ではないこというまでもあるまい。却て相對立するが故に兩者の轉換媒介が即という語で表わされるのである。否定即肯定といい、有即無といい、同様の關係に外ならない。今や我々は斯かる意味に於て常識即哲学ということが出来なければならぬ筈である。

ところで此様に對立的に區別せられるものが却て具體的には相合一して相互に轉換媒介せられることは、決して単に觀念的に思想するのみで實現せられることは出来ない。單なる觀念としては矛盾的に對立するものは飽くまで對立せしめられることを要求するのが、思想の原理としての矛盾律の意味である。矛盾的に對立するものが合一するというのは、靜的に固定せられた觀念の關係ではなくして、生活に於てはたらく主体の動性に外ならない。常識と哲学との轉換媒介も相對にして絶對なる主体のはたらくである。自が他の絶對否定として他を媒介とし、他が自の媒介として他即自なる如き動態が、始めて觀念の矛盾律的固定を破つて、有無相轉じ否定即肯定なる關係を成立せしめるのである。之を循環といえ、矛盾を循環に轉ずるのが絶對的自己であるといわれるであらう。その循環の内容は單なる思想でなくして行為であり、知識でなくして実践である、否、常識即哲学として成立つ生活の智慧は、單なる知識でなくして実践と媒介せられたる知識であり、行為に於ける思想なのである。これが曩に述べた哲学の常識と相通ずる實際性に外ならない。それであるから、此様な哲学は飽くまで生活行動に於てのみ實現せられる智慧であつて、実践を離れて語られる思想でなく、行為と獨立に成立する知識ではないのである。常識が生活としての知識であると同じ意味に於て、斯かる哲学は生活としての哲学であるといわれるであらう。それであるから、斯かる哲学の叡知は思想体系として概念的に組織せられるものでなく、端的に行動に於て表現せられる外無い。禪の道得というのは棒喝を行

ずることでも足りるのである、言辞の葛藤は所詮第二義以下である。生活としての哲学は禅の如きものに窮極する。西洋に於ても神秘主義が一部の人に由つて哲学の最も深奥なるものと認められる所以である。哲学が宗教と相通ずるのも此点に於てする。宗教の本質が容易に言表わし難きにせよ、それが相對と絶対との合一の、絶対者に於ける相對者の否定轉換に由る自証、を必ず含まなければならぬことは疑われない。ところで此は正に我々の見た哲学の本質でもあるのである。ただ宗教は絶対者に対する信賴歸依乃至讚仰感謝の感情を主とし、哲学は叡知に止まることを、一応兩者の相違と認めることが出来るであろう。併し否定轉換の飛躍、絶対無の現前とそれへの歸入、という構造は、宗教と哲学とに通ずる実践的信仰態度といわなければならぬ。常識も人生に対する信念を含む限り、此信仰に通ずるのである。それが哲学と合一すると考えられる所以である。

### 三

以上我々は哲学を専ら常識との關係に於て考えた。東洋思想に於ける哲学の意味は此側面を重んずること、何人も容易に認める所であろう。然るに現在我々の懐く哲学の概念はこれに盡されるとはいわれない。若し哲学が単に此の如き生活としての哲学に止まるとしたならば、哲学史に伝えられた學問としての哲学は如何なるものと解せられるであろうか。生活は直ちに文化でない。それは後者の公共的なるに対して私人的である。私人的なる生活の知慧としての常識は歴史に傳承せられるものではない。歴史の内容を成すものは一般に公共的なる文化であつて個人の私的生活ではない。哲学史に伝えられる哲学は單に生活としての哲学であることは出来ぬ。哲学も文化の一部としての學問たる意味を有するに由り、始めて公共的なる歴史の内容を成す



のである。然らば如何にして生活としての哲学は同時に学問としての哲学たる意味を有することが出来るか。西洋に於ける哲学の概念は専ら後の意味を主とすること疑われないが、それは如何にして東洋的なる哲学の概念と一に帰せられるか。後者に於ては治者の政治思想の外に、今迄述べた如く常識が哲学の媒介となるのであるが、前者に於ては西洋に固有なる科学なるものが哲学の媒介となること、多少でも西洋の哲学史に通ずるものの直ちに氣附く所でなければならぬ。然らば科学は常識と如何に異なり如何に聯関するか。我々は先ず此点を明にして哲学の二つの意味が如何にして統一せられるかを見ねばならぬ。

常識は既に述べた如く生活と合一せる知識である。併しながら我々の生活はそれを導く為に、却て単にそれと直接に合一する常識だけでは足りないことを、二つの方面から氣附かせられる。第一に、生活が我々の肉体的物質的生活の側面に於て充実せられ合理化せられる為には、単に各個人が自己の狡小なる經驗に由つて得る断片的なる知識を有するのみでは不足であつて、斯かるものを以てしては自然を支配し生産を効果的ならしめることが出来ない。物質的生産に於て個人が集团的協力を営まなければならぬと同様に、その物質的自然に関する知識に於ても、經驗が個人的でなく集团的に綜合せられ、啻に同時代同種族の生産に直接必要なる知識に止まらず、現在の生活には直接關係なき知識も自然の一般的法則を發見する媒介として獲得保存せられ、歴史的に集積せられ組織せられて、知識の体系が建設せられることを必要とする、斯くして、人間は現在の実用を離れて經驗を取得するのみならず、知識の為に人為的に經驗を配備し、自然に生起せざる條件を實驗的に装置して、法則の汎通を期し、更に仮説を導入して法則を統一し、以て自然の全体に互る知識を整頓組織しようとする。これが常識と独立した自然認識の科学化である。斯かる科学は縦其窮極の目的は実用にあるとしても、却て一時実用を離れ實際の必要から独立して、知識の為に知識を求める態度を執るこ

とを要求するのである。常識の係わる所は、此時此所に於ける此事であるに對し、科学の係わるのは、常に何処にでも繰返される普遍的本質である、といわれる。ところで人間の能力は凡てその自由なる活動を営むことを快とするに由り、知識の為の知識もアリストテレスの讚頌した如き、純粹なる知ることの喜を喚起し、以て科学を發達せしめる。而して科学の斯かる独立が人間の自由なる活動に俟つものである以上、其可能が個人の自由を何等かの形に於て認める政治組織に由つて保証せられることは、東洋に封建政治の永く続いた結果科学の發達を非常に遅延せしめ、西洋に於て希臘の民主政治と共に夙く科学の發達を見た、理由を推測せしめるに足りるであろう。併し更に自然科学の場合に於てよりも一層密接なる科学と政治との關係は、政治学法律学等の如き歴史的文化科学が立民政治の下に於て始めて十分なる發達を遂げ得る事に示される。常識は生産生活の必要に促されて自然科学にまで自己を發展させる傾向を含むものであるが、それにも倍して生活の必要上、その主たる内容となる所の人間知を、組織的なる社会知にまで發展せしめることが必要でなければならぬ。此が常識の科学を要求する第二の側面である。もと人間に関する知識が主として人と人との關係に就いての知識を意味するのであるから、それが生産に於ける人間の協力や統制に伴う社会關係の發達と共に、基体的なる人間知が社会知にまで發展し、社会組織の歴史的由来、其統制の方法、其処に發達する公共的文化の構造、等が単に個人中心的現在本位の常識の枠を破つて、歴史社会の文化科学にまで發展することは当然である。東洋に於ても法律政治の学は既に常識を越えて發達した。治者階級の常識は寧ろ必ず何等かの程度に於て斯かる学問的知識を含んだものと云つてよからう。併しそれが治者の自己中心的なる統治目的に専ら支配せられる間は、寧ろ技術的であつて科学的とはいわれなから、其限り未だ完全に常識の段階を脱しなかつたというべきである。それが真に科学となるのは立民的自治に於て、社会の政治的組織、法

律的秩序が当面の實用から離れて自由研究に委ねられた時に於てであつた。希臘の政治学は希臘民主政治の産んだ果実であつたといわれる。希臘人は自然に於けると同様の永遠なる形相を、国家の秩序に発見しようとしたのである。更に羅馬の法律思想が羅馬人の自由獲得、羅馬政治の民主化に伴つて發達したものであることは周知の通りである。常識の個人的私生活的立場は立民政治の公共的立場に於て其枠を破られ、社会的生活の歴史的文化科学にまで發展せしめられる。自然科学と歴史科学との両方面に互り、一般に科学が政治的自由の産物であることは是に由つて推定せられる。斯様に科学が西洋立民主義の所産なることは、啻に古代のみならず近世に於てもまた同様である。東洋の科学が常識の段階を十分に脱し得なかつたことは、立民政治の缺如に因すると云つて誤ではないと思う。科学は常識の實際性から解放せられた自由精神の産物である。日常の實用に間に合う因習伝統に反対しても、眞実なるものを求めよう、という精神なくして、科学の發達は庶幾せられない。現実の經驗に於て実証せられるものは、縦我々の先入見と異なるも自由に承認し、それに反するものは如何に神学的宗教信條と形而上学的概念とに支持せらるるも之を敢然として斥けるといふ実証的精神と、実証的事実は法則に支配せられ一般に存在は道理をもつと信ずる合理的精神とは、科学の二大支柱であるが、これは畢竟自由精神に伴つて始めて發揮せられるものである。

斯様に科学は常識の特色たる知識と実践との直接なる合一を破つて、知識を知識の為に自由に發展せしめんとする自由精神に伴うことに依り始めて發達するものであるから、常識と同じく實際性を特色とする哲学も、科学が常識の分裂に由つて發達する限り、常識と同様に科学と對立することを免れないように思われる。然るに他方から考えると、哲学は常識の陷る矛盾とその自己否定とに由つて發生するものであつた。其点から見れば、哲学も常識と對立することと科学と同様であつて、科学が常識の分裂に因り發達する如く、哲学も常

識の分裂に因り發達するといわれる。ただ科学の機縁となる場合には常識は知識と実践との分裂を経験するのであり、哲学の機縁となる場合には常識は知識そのものの分裂を経験することが、一見兩者の相違をなす如く見える。併し仔細に考えると、実は常識の知識と実践とが分裂するのも、常識の知識そのものが矛盾に由つて其統一を失うことから起るのであつて、若し知識としての統一が完全に保たれるならば、実践がそれから逸脱すべき理由は無い。假令逸脱が起つてもそれは実践の過失非運として匡正せらるべく、決してそれが一般的に常識の分裂を發生する理由とはならないのである。実践の逸脱はそれを導くべき知識が既に効力を失墜して新しき知識を要求し、後者に従つて実践が起つた為に前者から逸脱する結果となるのである。実は既に其処に知識そのものの矛盾が發生して居るのでなければならぬ。従つて科学の發生に因由となる常識の分裂は、同時に哲学の發生にも因由となるものに外ならない。ところで哲学の因由となる常識の知識としての分裂は、前に詳説した通り知識の矛盾である。然るに常識そのものは飽くまで實際的なものであるから、その矛盾というものも単に實際的に矛盾するだけのものに止まり、真に論理的に相容れない矛盾であるかどうかは直ちにわからない。之を裏返していえば、常識の實際的立場で矛盾が無いからといって、それで論理的にも矛盾が無いかどうか、即ち、それだけ分離せば矛盾が無いように見える知識が、その論理的帰結にまで降つて考えても果してなお矛盾が無いかどうかは、到底常識の立場で決せられるものではないのである。而し常識の知識は曩に特色附けたように、飽くまでも實際と結附くものであるから、それは科学に於ける如く論理的に意味が規定せられた概念の正確なる關係を備えず、概念を媒介とする理由帰結の推論的組織を有しないのである。常に實際の必要に従つて動く知識に、嚴密な意味で論理は適用せられない。従つて常識の矛盾というのは極めて表面的なるものに止まり、論理的な意味で相容れない矛盾というものは、実は常

識の立場では語ることが出来ないのである。果して然らば常識が哲学に発展すべき因由となるその矛盾なるものは、実は常識そのものの立場では確定せられないのであって、常識がその実際性から解放せられ、論理的に組織せられる科学の立場で始めて確認せられるものであるといわなければならぬ。是に由り哲学が常識の矛盾にその発生の由来を有するというのは、実は厳密には科学の矛盾に由来するということに変更せられなければならぬのである。斯くして常識から哲学が発達する過程には、厳密には中間に科学が媒介として介入することが認められる筈である。科学が介入することなくしては、哲学は常識と直接に融通して、十分明確に対立性を顕わすことが出来ない。単なる生活としての哲学は個人的私生活に属し、公共的に何人もがそれを学ぶことが出来る学問性をもつことがないのである。然るに前に述べた如く、真に具体的に合一するものは却て半面に明確なる対立を有しなければならぬ。直接に相融通するものは実は其合一を具体的にならしめることが出来ないのである。然らば哲学が真に具体的に常識と媒介せられるには、科学の介入により両者が一たび明確に対立せしめられることが必要な筈である。科学は哲学と常識とを分つと同時に繋ぐ。科学に由つて矛盾が徹底せられなければ哲学の矛盾即統一は具体化せられない。学問を有せざる単なる生活に止まる所の哲学は、哲学としての意義を十分に發揮する能わざるものと認められなければならぬであらう。

併しながら科学に由つて常識と隔てられた哲学は如何にしてその要件たる実際性を回復することが出来るか。常識と共有する所の哲学の特色たる、知識と実践との合一は、実際性を否定した科学の介入に由つて見失われはしないのか。科学が常識と哲学とを分つと同時に繋ぐというのは如何なる意味であるか。常識が哲学の発生を促す機縁となった矛盾は、矛盾無き知識の体系たることを其目標とする科学に於ては排除せられる筈ではないか。果して然らば知識は科学に窮極するので、其外に哲学の如き学問が存すべき理由は無く

はないか。学問としての哲学とは科学が再び実践と媒介せられた統一に外ならぬのではないか。それは科学の社会的実践に應用せられたものに過ぎないではないか。斯様な疑問は今や我々の当面せしめられざるを得ない所となる。

#### 四

科学が常識から發展するのは曩むかしに見た如く、常識の含む矛盾を解除する為にそれが實際生活と直接に合一する關係から解放して、知識を表面の現象から本質的なものへ深め、現象的に矛盾するものも本質的には矛盾の無い統一を形造る、斯かかる本質を認識するのが理論の任務である、とすることに依るのである。それ故科学も哲学と一致する所を常識に対して示すのであって、事实上哲学は久しく科学の最も一般的なる理論に外ならないと考えられ、存在の最も普遍的なる本質を認識するものとして普遍科学と称せられたのである。併しかし意外にも常識の矛盾を解除すべき筈の科学は、それ自ら如何にしても解除する能あたわざる矛盾に纏てん綿めんせられるのである。カントの批判哲学の功績の一つは之を明にしたことにある。肯定と否定との相矛盾する二命題が同時に相当の論拠を以て主張せられる所謂二律背反いむゆゑなるものは、即ち斯かかる矛盾に外ならない。而してカントが其時代の科学的認識の陥る二律背反として挙げたものよりも一層深刻なる矛盾を、今日の科学は現に示すのである。例えばカントが自然の空間的構造的に指摘したに止まる所謂数学的いむゆゑ二律背反は、今日では数学そのものの対象としての集合の無限連続に属するものとして、所謂数学の基礎危機を發生せしめて居る。無限集合に於ては部分と全体とが等値であるとか、連続は一方に於て要素の集合と考えられることが数学の精密思考法にとって必然なるに拘かわらず、ラッセルなどの思惟した如く極限の論理でそれが貫徹せ

られるものでなく、彼が論駁したベルグソンの直観主義と軌を一にする如き数学の直観主義が、連続を以て要素の集合に帰する能<sup>あた</sup>わざる自由生成の媒質と考えることを必要とするとか、いう如き所謂<sup>いわゆる</sup>集合論の逆説なるものは、曾て学の模範と目された数学を二律背反の矛盾に悩ましめて居るのである。物理学に於てはアインスタインの相対性理論は、夫々独立<sup>それぞれ</sup>にして相対立すると考えられる空間と時間とが、其測定に於ては却て互に融合して分離する能<sup>あた</sup>わず、ただ両者の聯合たる所謂<sup>いわゆる</sup>「世界」のみが物理学の認識に入り来るといふ矛盾を曝露し、更に新量子論に於ては従来物理学の認識の支柱と認められた因果律が制限を受け、要素的精密を否定せられて統計的大量効果を意味するに止まると認められるに至った。微視的見地から、電子の如き物質の終極要素たる微粒子の位置を観測するのに必要とせられる光のエネルギーは、その運動状態を攪乱するに由り、物質運動の記述に必要な位置と速度とが同時に精密には測定せられない、ということを主張するハイゼンベルクの不確定性原理に由り、物理学的世界の因果的構造は重大なる否定的制限を加えられ、他方に於て要素的精密さを有する因果を要求する巨視的見地と対立する。而して斯<sup>しか</sup>く観測が観測せらるべき系に擾乱<sup>じょうらん</sup>を与えるということに因由する不確定性は、認識が単に静止固定せる対象の模写でなく、対象とそれに対立する認識手段との媒介的統一の展開に外ならざることを示す点に、極めて重要な意義を示す。認識に参加する対象と観測装置とが要素的に分たれるものでなく、対立的に統一せられて否定即肯定的なる媒介の動態を形造るといふことは、既に連続の統一にも存した媒介的全体性に由来するためである。この全体性は生理学生物学に於て表面に現われ、一般に有機体の認識は一方に理化学的精密分析を要求すると共に、他方有機体が決して単に部分の集積として認識せられるものでなく、常に部分に先だつ全体の統一を豫想して始めて有機体として認識せられるという全体性（主機性）の原理を要求し、要素そのものが同時に全体であるとい

う矛盾を含むのである。生物の進化理論が一方に於て統計的数量的精密關係を示すと共に、他方に於て常に突然変異の不確定偶然性を豫想しなければならぬのも明白なる二律背反であろう。更に此様な全体の不確定的自由は心理学の形態説に於て徹底せられ、斯学の要素的見地、法則的機能關係の要求に対立する。今日の心理学の原理的問題が形態説と要素論との綜合に集中せられて居るのは、此二律背反を解く為と解せられる。併し其結果が折衷に終り真に徹底的に二律背反を解くことが出来ないのは、寧ろそれが解除するを許さないものであることを思わしめる。而して心理学の要素分析は精神現象を客観として認識する為に要求せられる見地であり、それに対し全体の自由なるものは主観としての精神に属するものであるから、兩者の対立しながら共に精神の規定に属するという矛盾は、本来主観と客観とが対立しながら相媒介し、相互に相即相入して分界せられないことを意味する。心理学に於て、認識が主観の客観を模写する關係として理解する能わざることは最も明白に顕現せられる。物理学の不確定性原理に既に潜在するというべき主観客観の否定的媒介は、心理学に於て表面化せられるのである。有機体に於ては此媒介が生命の内容に外から投入前提せられながら内から自覚せられるに至らない。精神に至つて此自覚が顕現せられ、主観客観の媒介的統一、見られる存在と見る作用との対立的統一が表面化する。而して心理学はなお見られる存在としての側面を主とし、見られた精神の学たるのであるが、反対に見る精神の作用を主とし、精神の見た精神、即ち表現に於ける精神の了解の立場に進むに及び、歴史的文化的認識に入る。これは自然科学に於て抽象せられ否定せられた主体が、自己の所行を自覚する立場の認識としての歴史的文化科学に外ならない。斯かる主観は客観に自己を没することに依り却て客体を主体化する実践者として、物質的自然の再生産を目指す經濟を基底とし、それに相關的なる人間の社会的關係を基礎としながら、却て此制約を自由の媒介に転ずる為に、政治、法律を其直接なる



所産として發展せしめる。更に此等の社会的生活の表現が、原理的に反省せられ、歴史の相対性に制約せられながら相対性の否定的自覚に於て絶対と媒介せられ、相対即絶対の自覚に入るに及び、倫理宗教芸術等の文化並に哲学そのものの歴史的自覚を成立せしめる。此等の歴史的文化的認識は、有ると共に作らるる、精神の表現に固有なる矛盾を含むのは必然であつて、一方社会的基底の方向に於て自然科学に通ずる客観的認識を發展せしめると同時に、他方歴史的認識に於て主体の自由なる表現的創造の跡を自覚するという方法上の二律背反を示す。それは存在の構造自体に由来するものであるから除くことが出来ない。法則科学の普遍性と歴史の個性とは、単に方法の二元性に止まるものでなく、認識そのものの二律背反を形造る。その由来する所は存在自身の自己矛盾に外ならない。歴史が自然の如く完結的統一を意味するものでなく、不断の革新を含む運動の過程たるのも、斯かる矛盾がその根本構造に属するからである。その統一はただ、相對の自己否定的運動が、即ち絶対否定の動即静である、ということに依る外無い。併しこの相対即絶対の自覚は最早歴史学に属するものでなく哲学に属する。歴史に至つて蔽うことの出来ない、有る所の客観と作る所の主観との對立的聯関の二律背反が、今や主観と客観との否定的媒介に於て主体的に統一せられ実践的に止揚せられるのである。此実践的媒介に於てのみ矛盾は却て矛盾のままに媒介統一せられ、矛盾を超越する統一は存在でなくして絶対否定作用の純動即静に外ならざることが實現せられる。對象的認識の必然に陥る二律背反に因つて、客観的對象は無に歸する、その對象の無を通して對象の束縛から解放せられた作用の自由が、カントの所謂先驗論的自由であつて、それが実践的自由を可能ならしめるのである。これは正に常識の矛盾を絶対否定的に超越するものとして初に考えた哲学が、今や科学を媒介として論理的に自己を具体化するものに外ならない。科学が相對的認識なるに拘らず思惟の本性上必然に無制約的絶対的認識たらんと要求

する結果は、避くべからざる二律背反の矛盾に陥ることを明にし、その自己矛盾の故に絶対認識の能力としての理性の論理を仮象の論理の意味に於て辯証法と名けた所の、カントの批判を徹底することに依つて逆転し、存在する客観の認識を作為行動する実践の主体に媒介して、主客の転換に由り有と無、肯定と否定、を絶対否定の動即静に於て相通せしめたところのヘーゲルの辯証法は、矛盾こそ絶対の根本原理であるとするものである。科学の論理的体系性がその二律背反、方法的矛盾に由つて哲学の知即行を媒介するが故に、哲学は辯証法の論理をもつ学問となるのである。而もそれは同時にその知即行に由つて、常識と相通する生活としての哲学の性格を依然として保有する。学問と生活とが今や哲学に於て対立しながら統一せられるのである。科学は前に見た如く常識の実際性から解放せられることに依つて発達したものであるから、それが再び生活の実際と結合せられる場合には、科学と生活とに共通する技術に由つて結合せられる外無い。所謂科学理論の応用とは之をいうのである。然るに科学の体系に内在する二律背反と方法的矛盾とは、科学そのものの否定的運動を発生せしめる。此否定的運動の必然を自覚し、科学そのものの自己矛盾を、相對の自己否定として即絶対の肯定に転ずることが、正に科学そのものの哲学への發展に外ならない。前に常識と哲学との相即を見た我々は、今や科学と哲学との相即を認め、科学即哲学といわなければならぬ。その転換の過程は歴史に於ける実践に存する。これはいわゆる応用の如き偶然的結合の關係でなく、科学そのものの自己否定的内面的運動が、絶対否定的主体的に自覚せられ、知即行として哲学に發展するのである。哲学に至つて、認識が模写でなく又表現でなくして媒介なることが明白であろう。模写論の客観主義と表現の主観主義とは主観と客観とが独立的に対立しながら却つて交互的に相豫想し、能限定即所限定として交互に転換する關係に立つ、ことを具体的に認める媒介論に止揚せられなければならない。

我々は前に科学の延長、その基礎的普遍化、として哲学を解する立場の由来を見た。批判哲学は此連続的延長の思想を打破して、科学の限界を自覚せしめた点に独特の意味を有する。併し同時に絶対認識としての哲学を断念するの餘儀無き歸結に陥った。知識と実践とが分離し、前者は科学に始終して哲学は後者に配当せられる外無かつたのである。併し知識を離れ科学を媒介とせざる実践は単なる主観的良心的行為に止まり、客観的倫理的、従つて政治的歴史的なる実践に係わることが出来ない。然るに今や辯証法的理性の哲学に至つて、科学の否定即肯定として、科学を活かすことに於て科学を殺し、その矛盾を否定から肯定に転ずることに依つて科学の主観から主体に転じ、科学そのものと合一することに依つて却て自由に科学を使い得る哲学が現われた。科学のそれに固着する普遍を、その相互の矛盾撞着に於て絶対的に否定して、直下に現実と媒介し、科学の固定する道理以上の、道理無き道理を捉えるのが哲学である。斯かる哲学は科学の歴史的発展に即し、之を實踐に媒介して歴史的相対的なる世界観を立しながら、主体的に之を相対即絶対化することに由り哲学の絶対性を保持する。而して此様な世界観は實際生活に媒介せられたものとしておのずから常識に通じそれに入込む。常識にはもと境界は無いのであるから、科学も常識化せられ、学問としての哲学もまた常識化せられるのである。併しこれは科学の媒介を経ざる哲学が常識と直接合一するのは同じでない。禪の神秘主義は常識の頼る所の知識思想の限界を打破する為にいわゆる公案なるものを用いる。公案は一般的に云つて知識思想を行詰まらせ同時に之を打開する為の矛盾命題と解してよかろう。併しその矛盾命題は単に知識否定の用に供せられる目的を有するに止まるから、如何に荒誕な逆説であっても差支無い。否却て荒誕であればある程、それに捉われないから一層よいとさえいわれる。従つて見性すれば公案は全然無用の廢物に歸するのである。其意味に於て公案は全く知識として活かさることなき背理逆説に止まり、決して

悟道の内に復活せしめられることを必然とするものではない。是れ見性悟道が知識を否定する一方であつて之を媒介とすることに依りそれ自ら知識たる意味を有するものでない所以である。曩にも述べた如く悟の境地を道い得るには棒喝で足りるのであつて、言辞を用うるも所謂因言遣言という如き否定的目的を有するに過ぎない。其境地の風光を積極的に伝えるものは芸術的象徴としての偈頌の類である。西洋に於ける神秘主義も所謂否定神学の形をとるを常とする。それは思想と言辞とを絶する無の境地に係わるからである。併し此の如き神秘的直観の立場はそれだけでは公共的なる知識と媒介せられず、所謂父子相承の秘伝的立場を脱しない。それは秘義に属し学問とならず、宗教の立場から客観的文化を否定する一方に偏して之を肯定する歴史的实践と分離し、国家の如き客観的制度に参加して政治に係わる途を杜絶する。印度の民族が歴史的に久しく衰退した所以も、一は斯かる神秘思想の影響に因る所があるであろう。これは今日の歴史的危機を救うに足りない。ヘーゲルがシェリングの絶対無差別の知的直観を極力排斥して哲学の論理性を強調したことは、無視すべからざる意味を有する。神秘主義は単に学問としての哲学を不可能ならしむるのみならず、実践のもつべき客観的歴史性を逸せしめることを免れないからである。しかるに科学の二律背反は正に所謂現成公案たる意味を有する。それは現実にして矛盾を含み、知識と悟性的思惟とを打倒する力を有するのである。而も哲学がその否定的肯定として論理的に之を媒介とするときは、哲学の実践的知識はその科学的知識と相即し、後者を活かすことに於て之を殺すもの、他意なく純一にそれに自己を委ねてそれと合一することにより、却てその魂となり主となつて自由に之を用い得るもの、となる、それが歴史的实践の行即知たる所以である。ここに今迄出会つた普遍科学としての哲学にも、科学批判としての批判哲学にも認められなかつた所の、科学の哲学に対する密接なる自己媒介の必然関係が生ずる。即ちそれ等に於ては科学が哲学に豫想せら

れるけれども、その関係は外面的であつて、或は単なる延長の為に或は単なる形式の為に、前提せられるに止まり、内容的に科学が哲学の内に媒介として入込み世界観の否定的質料となる如き内面的関係は無い。然るに科学の絶対否定としての哲学に於ては、哲学の内容は科学の内容と即し、後者の歴史的進歩が前者の世界観を規定するのである。是に由つて科学が哲学の実践的知識に媒介せられ、高き意味に於て技術化せられ實際生活に統一せられる、それが学問即生活たる哲学の具体的立場である。その論理としての辯証法は、論理にして而も論理の否定を媒介とするものである。是に由つて直観は論理の自己疎外として却て論理の媒介となる。直観と論理とが実践的に媒介せられる行即知が辯証法の論理に外ならない。辯証法を形造る三段階中第三の段階としての綜合は、実は第一段階の定立及び第二段階の反定立と同じ意味に於て論理に属するのではなく、論理と、論理の否定としての直観との、実践に於て媒介せられる知即行に属するのである。即ちそれは主体の媒介活動を意味する。思想知識の対象規定としては定立反定立の二つの外に第三の規定は無い。ただ客観的对象の主体化せられる実践に於て、定立反定立の矛盾が却て対象の無を通じて主体的作用の自由に於ける統一に綜合せられるのである。哲学は斯かる意味に於て科学の客観的認識を歴史的実践に媒介する行即知に外ならない。

日本精神は曾てその祭政一致思想の直接態に於て仏教の宗教的絶対思想と儒教の政治的相對思想とを媒介し、両者を包容して東洋思想の統一点となつた。併しそれは全く直接的なる相對絶対合一の立場であるから、宛も常識即哲学の立場に相当するものであつて、それだけでは歴史の現段階に應ずる哲学たるに足りない。今日の歴史的危機は到底常識の能く脱せしむる所ではない。ただ徹底的なる科学的認識を媒介として自由にして之を使い得る哲学のみ、之を超越する途を見出すことが出来るであらう。日本民族の歴史的使命を自覺した現

在から将来に向つての日本哲学は、具体的なる歴史社会の科学的認識を、否定即肯定的に媒介とする実践即知識としての斯<sup>か</sup>かる哲学でなければならぬ。端的にいえば科学を公案として用いると同時に、之を論理的に否定即肯定して自己の内容にまで化する所の、絶対否定の禪的行即知でなければならぬ。私はこれが東洋思想と西洋思想との実践的媒介として当来<sup>の</sup>日本哲学の立場たる意味を有するものと信ずる。それは明に神秘的非合理主義でなくして反対に絶対合理主義である。併<sup>しか</sup>その絶対合理主義の理性は、科学と否定的に統一せられ主体的自由に於て之を用い得る絶対否定の原理であるから、所謂合理主義<sup>い</sup>乃至科学主義とは一見相近くして而も相<sup>しか</sup>距ること千里ともい<sup>わ</sup>るべきものであろう。(十一、八、六)

- 『哲学と科学との間』（岩波書店、一九三九年一月第五刷）所収。
- 収録にあたり旧字は新字に、旧かなは新かなに改めたが、一部の漢字は旧漢字のままにした。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- 理解を助けるために「」に編者の註を附した。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセットを行い、 $\text{d}^{\text{v}}\text{i}^{\text{p}}\text{d}^{\text{f}}\text{m}^{\text{x}}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、

「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。